

日本語教育実習生の気づき分析と教師の振り返り

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/39677

日本語教育実習生の気づき分析と教師の振り返り

北京師範大学 外文学院 冷麗敏 lenglm@bnu.edu.cn

埼玉大学 教養学部 小出慶一 khnbts@f05.itscom.net

要旨

本研究は日本語教育実習生の実習授業に関する気づきに焦点を当て、これを教室の授業への振り返りとし、教師の日常化された授業を見直すことを狙いとするものである。授業を観察し、実習生の話を聞き、授業について語り合う、それは終わりのない過程だと見れば、本稿は、その模索を始めようとする試みでもある。

キーワード：日本語教育実習、気づき、授業、振り返り

1. はじめに

北京師範大学日本語教育教學研究所においては、2011年より2013年まで、海外の日本語教育実習プログラムの実施を行ってきた。その間、春学期は埼玉大学、秋学期は金澤大学からの日本語教育実習生を受け入れていた。本研究は、埼玉大学日本語教育実習における教育実践研究の一環である。ここでは日本語教育実習生の実習授業に関する気づきに焦点を当て、これを教師自身が日常の授業への振り返りとして狙いである。

2. なぜ教師の振り返りか

80年代以来、「教師の成長」が呼びかけられるようになる。その背景として横溝他（2004）は次のように述べている。

よりよい日本語教師を育成していく方法として、1980年代までは、教師として必要だと思われる技術を指導者が訓練によってマスターさせ、教える能力を伸ばしていこうとする「教師トレーニング」という考え方が主流を占めていた。しかしながら、教師が教室の中で実践に直面する問題は多種多様であり、トレーニングによって叩き込まれた一つの教え方を忠実に実行するだけでは対応できない場合も少なくない。そこで、「教師の成長」という考えで、教師の育成を図ろうとするようになった（横溝他：2004, 209）。また、岡崎・岡崎（1997）は、「教師の成長」を次

のように説明している。

教師養成や研修にあたって、これまで良いとされてきた教え方のモデルを出発点としながらも、それを素材に＜いつ、つまりどのような学習者のタイプやレベル、ニーズに対して、またどんな問題がある場合に＞、＜なぜ、つまりどのような原則や理念に基づいて＞教えるかということ、自分なりに考えていく姿勢を養い、それらを実践し、その結果を観察し改善していくような成長を作り出していく(岡崎・岡崎:1997, 9-10)。

このように、日本における日本語教育界では80年代以降、「成長する教師」「自己研修型教師」が提唱されるようになってきた。この教師の成長は、上述のように、授業について自分なりに考え、そして実践する。さらにその結果を観察し、改善をするといったプロセスを経て成長を作り出していくことである。

一方、中国国内の教育界においては、ほぼ同じ時期だが、「教師の専門的發展」(教师专业发展)を教師教育の理念とし、教師の生涯学習や自己更新・自己成長すること(教师终身学习、不断自我更新)が提唱されている。教師の自己成長のアプローチとしては、教師が授業への振り返りである。中国語ではいわゆる「反思教学」のことだが、これはつまり、教師が授業観察等の方法により、自身の授業の振り返りをして授業の改善や教師自身の成長を図ることである。

ちなみに中国語では「反思(振り返り)」という概念が次のように定義されている。「振り返り」とは、個人が自己意識またはメタ認知により、自身の心理的活動をモニターすることと、個人が自分と他者と大きく共通している心的世界を有していることを改めて認識することにより、人間の心理的活動や思考における新たな知識を獲得すること。(反思包括两个方面：一是个体通过自我意识或元认知来了解、监控与调节自身的心理活动或思维活动。二是个体通过重新审视自己与其他个体具有很大相通性的内心世界来获得有关人的心理活动与思维获得的新知识。

朱：2012,《教师专业发展理论研究》)

また、教師の振り返りに関し、これは意識期、模索期と修正期という過程であること、教師が自身の職業の過程において絶え間ない自己研修を経てこそ専門家型の教師へと成長していくことができる(反思是一个

过程,要经过意识期、思索期和修正期;教师在整个职业成长过程中要经过长期不懈的自我修炼才能成为一个专家型的教师。)

上述のように、中国の教育界においても教師の振り返りや自己研修や教師の成長が教育の理念として提唱されている。このように、教師が振り返りという活動は、自身の教育活動について改めて見直しをすることにより、教師自身の専門的能力を高めることや教師としての成長につながるものが提唱されているのが中国も日本も同じであることがわかる。

3. 日本語教育実習に関する先行研究

3.1 日本の日本語教育における関連の研究

日本における日本語教育分野では、これまで日本語教育実習に関する研究が数多く行われてきた。これには大きく3種類に分けられる。

(1) 教育実習指導のための基礎研究や実証的研究で、教師の授業と実習生の授業の比較をして日本語教育実習指導への指針を得たり、提言をしたりするものである。これには、斉藤他:1991「日本語教育実習への提言—実習経験を踏まえて—」;堀口:1992「日本語教育実習指導のための基礎研究」;石田他:1992「日本語教育実習に関する実証的研究」がある。

(2) 実習生の成長や学び、実習生の変容を考察するものである。これには次のような研究が見られる。

小熊:1999「大学院での日本語教育実習がもたらす教育観の変化」;河上:2007「実習生とマニュアル—日本語教育実習生の成長とマニュアルとの関係—」;横溝:2009「過密スケジュールの日本語教育実習で実習生はどのように変容するのか」;清水:2006「多言語多文化共生日本語教育実習における実習生の学びのプロセス—修正版グラウンディッド・セオリー・アプローチによる内省レポートのテキスト分析—」。

(3) 日本語教育実習を教師成長の基盤構築の場という意味でとらえ、教育実習の支援者の振り返りを考察する研究である。これには池田:2008「日本語教育実習における支援者の振り返りと考察—実習研究の勉強会を事例として—」等がある。

3.2 中国国内における関連の研究

中国国内においては、教育実習に関する研究は主として教育分野で行われたものが多く見られる。これらの研究には、教育実習に関する報告、教育実習の評価、また、海外における教育実習の理念や制度等について紹介するものがある。

金玛莉, 江岳军:2006「教育实习调查报告」;

张海舰: 2005「基于反思的发展性教育实习评价模式研究」;

李伟:2005「行动研究与教育实习指点教师角色再定位」;

李宜冰, 贾朝东:2009「日本教育实习制度与启示」;

樊睿:2010「美国职前教师教育实习探析」;

李崇爱, 王昌善:2005「欧美发达国家教育实习的模式与理念」。

4. 本プログラムにおける日本語教育実習の概要

(1) 実習期間・実習授業

日本語教育実習は2013年3月11日(月)～3月22日(金)で行われ、実習生4名(男性1名、女性3名、そのうち、学部生が3名、大学院生1名)が参加した。

実習担当の授業は主に日本語専攻課程基礎段階の科目で、「総合日本語」(1,2年生)、「日本語朗読」(1,2年生)、「日本語聴解」(2年生)、「日本語快速読解」(2年生)、「日本語文法」(2年生)である。

(2) 実習指導

本プログラムでは、実習生の実習指導に当たり、打ち合わせ会と振り返り会という二つの会を中心に展開している。前者は、実習予定の授業のための準備会である。ここでは、実習生と実習指導教師が教材、授業の進め方や教案準備などについて相談する。後者は、実習生と担当教員とで、実習授業についての反省会である。ここでは、実習生の授業について、指導教師がコメントをしたり、実習生自身が授業で気づいたことを語ったり、指導教師に質問をしたりして、みんなで話し合いながら授業の振り返りを行う。この二つの会が本プログラムの実習指導のサイクルを構成し、実習指導のシステムでもある。

図1のように、実習予定授業の準備について、教師(T)と実習生(J)が打ち合わせ会で話し合いをする。その後、実習生が教案を作成して教

師にメールで送る。それから、実習生が教師からコメントもらった教案を修正して、再度、教師に送る。そして、教師のコメントをもらった実習生が教案を再修正して練り上げる作業をする。その後、実習授業に臨む。最後は実習授業の振り返り会を行い、次回の授業の打ち合わせ会をする。

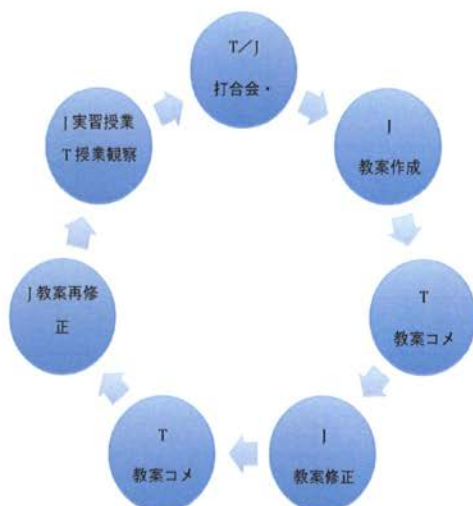


図1 実習指導のサイクル

5. 本研究の調査方法とデータ

(1) 調査方法

本プログラム終了後、実習生には自身の授業や振り返り会の話し合いで、担当した授業に関し、気づいたことについてレポートを書いてもらった。その後、実習生が帰国後、アンケート調査を行った。レポートは4人から、アンケート調査は2人から回収した。アンケートは授業（教材、教室、学習者を含む）、実習生というように、カテゴリーのみを与え、実習生に自由記述をしてもらった。

(2) データ

実習生のレポートとアンケート調査の回答から、実習生が実習授業に関する気づきの記述のみを抽出した。その後、気づきに関し、キーワードを抽出し、カテゴリー化し、これを分析のデータとした。表1は抽出

したカテゴリーを示したものである。

表1 抽出したカテゴリー

カテゴリー	学習者対応	記述数	授業の進め方	記述数
	学習者の知識量・ 語彙・背景知識	3	文法の説明	2
	質問・答え仕方	4	板書・PPT	4
	コメントの仕方	2	時間の把握	2
	位置	3	授業の導入	2
	目線	1	授業の目標	1
	話し方	1	教材の取り扱い	1
総計	9項目	14	7項目	12

表1で示したように、抽出したカテゴリーには、大きく「学習者対応」と「授業の進め方」に分けられた。これについてさらに下位分類したものは9項目と7項目となっている。そして、各下位分類した項目において、実習生の気づきに関する記述の箇所を数えた結果、「学習者対応」では14箇所、「授業の進め方」では12箇所の記述が見られた。

6. 実習生の気づき分析と教師の振り返り

表1のように、実習生の気づきは、「学習者対応」が14箇所、「授業の進め方」が12箇所の記述が見られた。先行研究では、実習生と教師の授業の違いは、学習者対応がないものとあるものとで異なっているとあるが、本研究の分析結果から見れば、実習生にとっては、学習者対応は、もちろんのこと、授業そのものも難しいようだ。次では、実習生の気づきについて具体的に分析をしながら指導教師（以下、「教師」と称する）自身が授業に対する振り返りを行う。なお、分析に当たり、紙幅制限のため、実習生の気づきに関する記述を代表的なものに限って示しておき、他は割愛する。

(1) 学習者対応＜学習者の知識量・語彙・背景知識＞

学生の知識量、能力値が読めず、常に手探りで授業でした。そのため学生は何を知らなくて何を知りたいのか、どの程度の説明で伝えたいことが伝わるのかは、とても難しい点でした。

しかし、学生の知識量を大体把握できたと過信しすぎたり、これくらいのことなら知っているだろうという思い込みをしたりして、説明を省き、学生に伝わらないという事態を招いてしまうのは、危険だとも気づきました。(Sさん)

日本語母語話者にとって当たり前の知識も、学習者にとっては当たり前ではないことを理解してから授業をする必要がある。例えば、銀杏に対する日本人のイメージは道に落ちている臭い実だが、学習者のイメージではおいしいものである。なのに、銀杏を臭いですね、などと紹介すると学習者にとってはわかりにくい。(Mさん)

教師の振り返り (1)

教師には当たり前のことでも、また学習者が当然知っているであろうことでも、実際はそうでない可能性が十分ある。授業では、教師が学習者とお互いの共有知識について、こまめに確認する必要があることが示唆されている。

(2) 学習者対応＜教師の説明・質問・コメント＞

「質問はありませんか？」と、聞いた後、もう少し間を開けて頭の整理をする時間を取った方が良かったと感じました。

教師が学習者に内容が理解できたかどうかを聞く際に「わかりましたか」と聞いた場合、例えわかっていなくても学習者は「わかりました」と答えることの方が多い。質問の仕方を考える必要がある。(Kさん)

教師の振り返り (2)

「質問ありますか?」「わかりましたか?」は、よく知られている教室のティーチャー・トークである。そもそも教師の質問は何のためにあるのか。また、これらの質問のように、ときには教師が口癖になっているほど好んでいるのは、実際に学習者のことを確認するための質問ではなく、多くの場合、教師が授業の段取りをするために行ったものではな

いだろうか。もしそうではないとすれば、授業における教師の質問というのは、学習者とインターアクションをとるための手段の一つであるべきだと、ここで実習生の気づきにより教師の質問の仕方について改めて考えることができた。

(3) 授業の進め方<文法の説明>

文法を説明するための文で文法の部分以外に分からないところがあると学習者の理解の妨げになる。(K さん)

例をたくさんあげればよいものと考えていたが、そうでもないらしいことが分かった。かえってお互い混乱してしまう。(S さん)

教師の振り返り (3)

文法の例文は、なるべく学習者の理解に支障が出ないような文が望ましい。教師の文法説明は、ただたくさんの例を挙げればよい、ということではないようだ。おそらくこれは教室の媒介語にもよるかと思われるが、もし、教師と学習者とは共通した媒介語があれば、特にお互いに母語の場合、簡単に分かりやすい例文のほうが最も効率的であろう。

日本語専攻課程の授業では、文法の説明が欠かせない授業活動である。ただし、教師の文法説明は、たくさんの例を挙げればよいのか。それとも分かりやすく、数少ない例文で済ませたほうがよいだろうか。これに関し、やはり教室の媒介語や学習者の母語等の状況によって判断したほうが妥当であろう。

(4) 授業の進め方<板書・PPT>

授業ではパワーポイントを利用しているため、むしろ板書は時間の無駄なのではと実際に授業をする前まで考えていた。そのため私は授業をする際ほとんど板書をせずに進行したが、結果学習者は混乱し、理解できていないようだった。(S さん)

特に1年生の生徒は語彙数が少ないため、教師が説明のために使用する例などの語彙も分からないことが多く、長音や促音なども正確に聞き取れていない。そのため、黒板に漢字と振り仮名を板書する必要がある。(K さん)

教師の振り返り (4)

実習生の気づきから分かるように、どんなにマルチメディアの設備が整った現代化された教室でも、教師の板書は省けないものだと改めて認

識できた。また、教師の PPT は事前に用意できるものに対し、板書は教師が学習者の反応を観察しながら、その時に用意するものである。つまり、板書というのは教師の臨機応変の力量の一つといえる。また、こまめな板書は学習者とのインターアクションの手段の一つでもあることがここで改めて認識できた。

(5) 授業の進め方<時間の配分>

時間配分は、経験者の私にしても、むずかしかった。学生たちが優秀で、知っていることも多く、また、緊張していたせいもあって、早めに進んでしまった。(N さん)

今回の教育実習での私の一番の反省点は、時間配分です。(中略) または足りないくらいの内容のものを作ったにもかかわらず、時間が余ってしまいました。これは、授業中に学生がまだ自分の頭の中で考えたり、辞書を使って問題点を解決しようとしていたりしている段階で、先に進んでしまったためだったと考えられます。(H さん)

教師の振り返り(5)

実習生の気づきに共通しているのは、授業の時間が余ってしまうということだった。実際に、実習授業の観察でも見られたが、実習生が授業を進めるのに精一杯で、学習者とインターアクションを取る余裕がほとんどなかった。授業は、教師が伝える・教えるための時間だけではないことが改めて認識できた。

7. 終わりに

実習の主たる目的は、初心者たる実習生に現場での経験の機会を与え、その分野に参加するための第一歩を提供することである。

だから、実習の主役は実習生であり、実習についての研究の主役も実習生であり、指導教員側(という用語が適当かわからないが)にとって、実習とはどんな経験なのか問題にされることはほとんどない。

今回の実習分析の観点の一つとして「教師の振り返り」ということが取り上げられたのは、熟達者の立場にある教師に、改めて自分の授業、授業での行動などを意識的に振り返る機会として、実習を見直すことができるのではないかという発想からである。現場の教師にとって、自分の授業を検討する機会は意外と少ないのではないのか。

また、実習生から見れば、現場の教師は熟達者ということになるかもしれないが、熟達者か初心者かという区分は、程度の問題であって、連続的なものに過ぎない。あえて言えば、熟達が進むとは、何かが安定的にできるようになることではあるが、成長が止まってしまう危険性と裏腹の関係にあるとも言える。成長し続けるのは難しいかもしれないが、少なくとも止まらずにいるためには、自らを「振り返る」機会がいろいろな形で与えられることが望ましいのではないかな。

実習において、指導教員は、実習生を支援する立場にある。職場での支援のタイプを検討した中原（2006）では、「職場における他者からの支援」として、「業務支援」「内省支援」「精神支援」というような異なるタイプの支援のあることが指摘されている。実習について言えば、教員は「業務支援」の役割が期待されていることになる。

では、支援する側である教師は、どんな学びがあるのか。業務支援の源泉はどこにあるのか。源泉を豊かにし、自身の成長を止めないようにするための機会の一つとして、実習というものを位置づけることができるのではないかな。それが、この稿の試みである。

授業を観察し、実習生の話を聞き、授業について語り合う、それは終わりのない過程でもあるが、それは尽きせぬ問題の宝庫であるということでもある。この稿は、その模索を始めようとする試みでもある。

参考文献

- 中 原 淳：2010『職場学習論』東京大学出版会
- 冷麗敏・小出慶一（2013）2013 年大学日本語教育と日本語学国際シンポジウム口頭発表（同済大学にて）
- 金瑪莉, 江岳军:2006「教育実習調査報告」湖北教育学院学报
- 张海舰: 2005「基于反思的发展性教育实习评价模式研究」, 曲阜师范大学硕士论文, (2005)
- 李伟:2005「行动研究与教育实习指点教师角色再定位」, 浙江师范大学
- 李宜冰, 贾朝东:2009「日本教育实习制度与启示」, 太原师范学院学报
- 樊睿:2010「美国职前教师教育实习探析」, 西南大学, 硕士论文
- 李崇爱, 王昌善:2005「欧美发达国家教育实习的模式与理念」, 教育评论